

音 楽 科

乗 富 章 子
沢 野 景 子
東 東 実

1 音楽科の本質について

私たちは、音楽科の本質を次のようにとらえてきた。

楽しさを感じながら 自分の音楽的感受の世界を広げていくことができるようになること

音や音楽の楽しさを感じながら、表現や鑑賞の活動をすることによって、子どもは音楽のよさがわかり、音楽を美しい、快いと感じる感性が磨かれていくと私たちは考えている。音楽的感性が磨かれれば磨かれるほど、次に出会う音楽に対して、より楽しくより美しい表現をめざして活動していくことが期待される。その結果子どもは、自分の音楽的感受の世界を自分なりに広げていくことができるようになる。

つまり私たちは、音楽科の本質を、楽しさを感じながら表現や鑑賞の活動を重ねていくことで、自分の音楽的感性を磨き、自分の音楽的感受の世界を広げていくことができるようになることととらえている。

2 本質にもとづく基礎・基本について

上記のように音楽科の本質をとらえた上で、それにもとづく基礎・基本について考えた。

子どもは、友達と心を合わせて歌ったり、楽器を演奏したりするとき、音楽の楽しさを実感し、その喜びを味わっている。そこでは、音楽の美しさと同時に人の心の豊かさ温かさにも触れて、自分の気持ちや想い、夢や想像の世界などを大きく膨らませながら生き生きと表現している姿を見ることができる。その姿こそ「楽しさを感じながら自分の音楽的感受の世界を広げている」姿であろう。

私たちは、日々の授業において、このような子どもと音楽の自然なかかわりの姿や、音楽の美しさに感動し、積極的に音楽活動を進めようとする姿を実現するには何が大切かを考え、それを基礎・基本ととらえることにした。

まず前提となるのは、音あるいは音楽そのものへの関心である。自分にとってどんな音楽が快いのか、どんな音を大切にしたいのかを感覚的にとらえさせたい。その上で、音や音楽に自分の心（想い）を乗せて心から楽しいと感じ、表現しようとするのである。

すなわち、音楽科の基礎・基本とは、

音に心を動かし 音を楽しむこと

であるとした。

3 自己の学びを広げ深めるについて

音楽科における「自己の学びを広げ深める」とは、「音に心を動かし、音を楽しむこと」ができるような活動をしていく中で、子どもが音や音楽の楽しみ方を、自分なりに身に付けていくことである。

昨年度の研究で、私たちは音楽科の基礎・基本に照らしながら授業の核となりうる価値ある活動をさまざまに工夫することで「自己の学びを広げ深める」ための方策を求めた。

今年度は、「自らの活動を促すゆとりを大切にす」および「一人ひとりの活動を見てとり生かす」ことを考慮しながら、学習構想の見直しを図っていくことにした。

(1) さらなる教材の精選を図るなどゆとりある学習構想をたてる

これまでは、一つの題材について2～3曲を教材として扱ってきた。今年度は、その題材に最もふさわしく音楽的価値があると判断した楽曲1～2曲を教師が教材として選んで扱ったり、子ども自らが選んで学ぶことができるようなゆとりある学習を構想したいと考えている。

(2) 芸術としての音楽の特質に触れるような楽曲との出会いを図る

芸術としての価値ある音楽に触れることは、子どもの心を大きく揺さぶり、表現や鑑賞への意欲を十分に高める引き金になると思われる。

音に対する興味を広げるためにさまざまな楽器に直接触れるとか、必要に応じて原曲を鑑賞するとか、思わず身震いするようなすばらしい生演奏を見たり聴いたりするなど、音楽の特質に触れるような出会いを体験させることで、個々のイメージを十分に膨らませたい。

(3) 音や音楽そのものに関わる活動を重視する

子どもはとかく納得するまで話し合いをしようとする。それを必ずしも否定するものではないが、音楽の授業においては、まず音に関わる活動を重視したい。音で確かめ、音で共感し、音そのものの音楽的価値を求めることで、一人ひとりの音に関わる活動を保障したい。想いを持つことができても、それが表現に生かし切れずに立ち止まってしまうことが多くあった。想いを表現に生かすのに必要な技能ならきちんと教えたり、練習が必要なら時間を与えたりして、音が個々の活動の中心にしっかりと位置づくような配慮をしていきたい。

(4) 自分の表現を振り返り、新たな意欲を持つことができるような場を持つ

自分なりの想いを持ってそれを表現してきた子どもが、自分の表現を録音して聴いたり、発表したり、友達に聴いてもらったりして自分の表現を振り返り、自信と新たな目標に向かう意欲を持つことができるような場を設定したい。

表現が完成した段階ばかりでなく、途中でも、短時間でも、個やグループの音に耳を傾ける場を持ちたいものである。この時に、教師や子ども同士の温かな心の交流を心がけ、良いところを認め合う姿勢を持てば、子どもは自分の想いを確かめ、自信を持って次のステップへ進むことができるようになるだろう。